

---

# 異世界の朝

するめ315

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異世界の朝

### 【著者名】

NZコード

N8717Q

するめ315

### 【あらすじ】

朝起こされてもたら、王様の寝室でした。還り方はわかりません。でも私、異世界にドキドキしてます。

好奇心が強いせいで危篤な運命をたどる女子高生の話。

(前書き)

思ひつを短編。 むりしかつたら読んでください。

「つまりお前は、『』がどこだかも、どうして『』にいるかもわからないと……。」

「はい。そうなんです。」

「……はあ……もういい。頭が痛くなる。」

すがすがしい朝の光を浴びながら、人が4、5人寝られそうな広いベッドの上で、シーツ一枚まいただけの姿で、類をみないほどの美青年に事情聴取されている私、小町勇姫こまちゆうき16歳。ピッチピチの女子高生である。

なぜこんな事態になつたかといつと。

\* \* \*

「…………。起き……。おい、起きる。」

「…………。お兄ちゃん……後5分……。」

「私は、お前の兄ではない。起きる。これ以上待たせんなつたらたき切る。」

「え……」

飛び起きた私が見たものは、鮮やかなブロンドのロングヘアと、エメラルドグリーンの瞳をもつた絶世の美人だった。

「……やつと起きたか。」

「…………おはようございます。つかぬことをお聞きしますが、男性の方ですよね。」

「…………男以外の何に見えると…………。」

「ですよね。あーよかつた。で、『ジジビ』ですか。」

美人改め、美青年の後ろに見えるのは、私の家が丸々入りそうなほど広く、豪華な部屋。

ベッドの上で私は裸だが、とくに気にしない。私は基本寝るときは裸族だから。このでつかいベッドにかけてあるでつかいシーツを引つ張つて身体にまいとけば問題ない。

それよりも、私の記憶が正しければ、昨日は自分の部屋のベッドに入つて寝たはず……。なぜこんなところに。

「…………これはセーラー国王の寝室だ。それより、私の質問に答える。答え次第では命はないと思え。この部屋に、ましてベッドの中などどうやって入つた。その格好を見る限り、大臣や貴族から私を誘惑するために送られてきたか。それとも、他国からの暗殺者か。」

「命のために答えますが、この部屋にどうやって入つたかはわかりません。起こされたらここでした。この格好は、誘惑や気を緩ませるためにものではなく、ただの趣味です。私、寝るときは基本裸なんですね。」

「…………どうやって入つたかわからないだと。嘘を言つた。お前、どこから来た。」

「生まれも育ちも日本国の首都東京です。」

「…………ニッポン……知らない国名だ。どこにある国だ。」

「東の方にある小さな島国です。最近私が注目してるのは主な産業は漫画やアニメです。あと、中小企業である町工場の技術力は世界一だと思っています。」

「アニメ？マンガ？それに、東にある島国…………。東には確かに島国があるが、ニッポンとかいう名ではなく、穂澄国(ほずみこく)という国だぞ。隣国のセレナーデ国が貿易をしているはず、確かに主な産業は医療だったと記憶しているが……。」

「…………このセーラー国は、何大陸にある国なんでしょうか…………。」

「……大陸の名も知らないのか……」*ヒ*は世界で最も大きいマヌー

大陸にある3カ国の一つだ。」

「……あのう……私……もしかしたら……異世界つてやつからきたのかもしないです……。」

美青年の驚きの顔を見ながら、告げた。最後の方は聞きとるのがやつとのくらい小さな声になつていた。

「い……異世界だと……。」

「はい。」

「そ……そんなの信じられるか。」

「でも、だつて……」*ヒ*の大陸の名前も國の名前も、私の全く知らないものです……。」

「……か……還り方は……。」

「わかるわけないじゃないですか。起きたら< i>ヒにいたんですよ。」

「だよな……。」

「はい。」

「つまりお前は、*ヒ*がどこだから、どうして*ヒ*にいるかもわからないと……。」

「はい。そうなんです。」

「……はあ……もういい。頭が痛くなる。」

目の前の美青年は頭を抱えてしまつた。赤の他人がこんなにパニッ  
クになつていいところで悪いが、実は私、かなり異世界に興味しん  
しんである。

異世界トリップという小説や映画、漫画でしかないようなことを、  
直に体験しているのだから当たり前だ。

還る方法は異世界を楽しんでから探しても遅くないはず。いや、楽  
しみながら探すという手もある。

家族や友達には心配をかけるかもしれないが、還つたら頭を下げて謝ろう。

今は「こ」の、未知なる体験を満喫したい。

「…………おい。」

「はい。」

知らないうちに自分の世界に入っていたらしい。田の前の美青年が復活していた。

「お前……不安ではないのか。」

「まあ……不安といえば不安ですけど、今は「こ」の未知の体験を満喫し尽くしたいです。還る方法はおいおい考えます。」

「ほう…………。」

美青年の田があやしくひかり、得も言われぬ不気味な笑みを浮かべた。  
なんだかやばい感じの雰囲気である。

しかし、次の瞬間には元通り。気のせいだったかな……。

「お前、名はなんという。」

「…………名を聞くなら自分から名のる。これはどこの世界でも常識だと思つていましたが……。」

「…………バッシュ・レオン・ハルベルト＝ゼーラだ。だいたい分かつているとは思うが、この国の王だ。年は24になる。」

「小町勇姫16歳。女子高生やつてます。勇姫つて読んでください。」

「…………女子高生と言つのはなんだ。」

「高等教育を受けている女子のことき、私の国ではそつ呼ぶのですよ。おじさんたちの注目の的です。」

「……なんだか気持悪いな……。」

「仕方ありません。おじさんたちも田舎のストレスがあるのであります。」

「…………そりゃ。…………そろそろ話を戻してもいいか。」

「はい。どうぞ。」

「お前…………いや、勇姫。この世界に興味があるといっていたな。しばらくこの世界に滞在するつもりであろう。」

「はい。」

「ならばここに住むとよ。」

「こいつて、この部屋のことですか。」

「いや、この城のことだ。別にこの部屋でも構わないが……。まだ婚礼の儀をしてないしな。」

「最後の方聞き取れませんでした。なんですか。」

「なんでもない。関係のないことだ。」

「そうですか……。でも、いいのですか。私を住ませても。」

「構わん。部屋は余っている。私の隣の部屋を用意させよ。それに教師もつけてやる。」

「教師？」

「この国の読み書きや常識を知つておいた方よいであら。話は通じるようだから問題ないな。」

「わー、ありがとうございます王様。」

「いや、せいぜい励めよ。それと私のことは王様ではなく、バッシュと呼んでくれ。それと敬語も無しだ。」

「はい。あ、間違えた。うん。本当にありがとうございます。」

\* \* \*

その時の私は知る由もなかつた。

勉強の内容がお妃さま教育だなんて、知らないうちに貴族の養子に入れるなんて、お城の外にはバッシュがいないと一歩も出してももらえないなんて、本当に知る由もなかつた。

3年後、還る方法もわからないまま、バッシュによく似た面  
ぞしの皇子を腕にかかることになるのは別のお話。

(後書き)

もしかしたら続くかも?

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8717q/>

---

異世界の朝

2011年2月14日06時25分発行